

# 赤水さん 地図に広がる いきいき人生

## ⑨大往生

〇代水戸藩主・徳川斉昭の肖像画



「戻ってからも研究に余念がなかったようです。ところが江戸後期の1820年代に家が火事になり、赤水の晩年の資料も江戸か

は、どんな暮らしをしていたのでしょうか。

「戻ってからも研究に余念がなかったようです。ところが江戸後期の1820年代に家が火事になり、赤水の晩年の資料も江戸か

は、どんな暮らしをしていたのでしょうか。

「戻ってからも研究に余念がなかったようです。ところが江戸後期の1820年代に家が火事になり、赤水の晩年の資料も江戸か

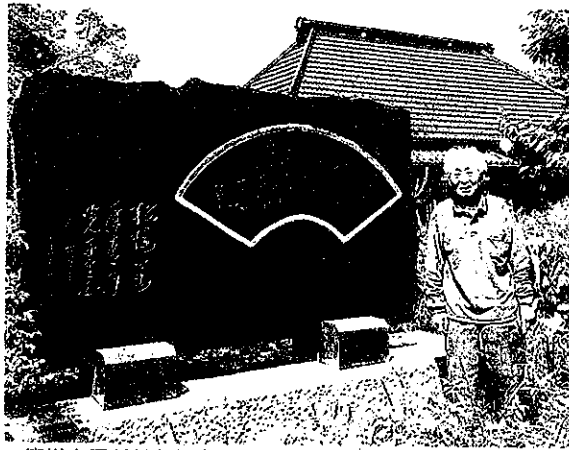
は、どんな暮らしをしていたのでしょうか。

「戻ってからも研究に余念がなかったようです。ところが江戸後期の1820年代に家が火事になり、赤水の晩年の資料も江戸か

は、どんな暮らしをしていたのでしょうか。

「戻ってからも研究に余念がなかったようです。ところが江戸後期の1820年代に家が火事になり、赤水の晩年の資料も江戸か

# 巨星墜つ 斉昭も松陰もしのぶ



徳川斉昭が長久保赤水の子孫に贈った「扇の和歌」を刻んだ碑と、長久保和良さん＝高萩市赤浜

ら持ち帰ったものが灰になってしまったんです」  
残念がるのは長久保和良さん(88)。和良さんは赤水さんの長男藤八郎の次男の子孫で、赤水さんの旧宅跡にお住まいです(※旧宅跡には藤八郎の三男の子孫の方もお住まいです。長男の松太郎は早世)。

火事かなければ赤水さんの晩年を知ることができたのに、実に惜しい。

けれど火事は彼の没後のこと。赤水さんは1801(享和元)年7月23日、85歳で大往生します。「(葬式は)儉約贅棄にせよ、棺はあり合わせの板でよい、

「自分が身にまとう」袴は紙でもよい」。厳格な赤水さんは自らの葬式についても遺言で指示しています。彼が遺言を書いたのは、赤浜に戻った81歳の年の暮れです。既に決意の痛郷だったのでしょう。

実は赤水さんが亡くなり、まだ香華が絶えない8月3日、偶然にも伊能忠敬(1745～1818)が日本地図作製のため、測量隊を率いて赤浜を通過します。彼はこまめに日記をつけていますが、「長赤水(出村也)とサラツと書いてます。忠敬だつて赤水さんが測量せずして作製した日

「自分が身にまとう」袴は紙でもよい」。厳格な赤水さんは自らの葬式についても遺言で指示しています。彼が遺言を書いたのは、赤浜に戻った81歳の年の暮れです。既に決意の痛郷だったのでしょう。



測量する伊能忠敬の銅像＝北海道福島町豊浜

本地図(通称・赤水図)の評判は当然知っていますから、内心、「ワシも……」とライバル心を燃やしたに違いありません。

没後も赤水さんの名前は残ります。6代治保は赤水さんの生前に自宅を訪れていますが、彼の没後も7

「自分が身にまとう」袴は紙でもよい」。厳格な赤水さんは自らの葬式についても遺言で指示しています。彼が遺言を書いたのは、赤浜に戻った81歳の年の暮れです。既に決意の痛郷だったのでしょう。

「自分が身にまとう」袴は紙でもよい」。厳格な赤水さんは自らの葬式についても遺言で指示しています。彼が遺言を書いたのは、赤浜に戻った81歳の年の暮れです。既に決意の痛郷だったのでしょう。

「自分が身にまとう」袴は紙でもよい」。厳格な赤水さんは自らの葬式についても遺言で指示しています。彼が遺言を書いたのは、赤浜に戻った81歳の年の暮れです。既に決意の痛郷だったのでしょう。

「自分が身にまとう」袴は紙でもよい」。厳格な赤水さんは自らの葬式についても遺言で指示しています。彼が遺言を書いたのは、赤浜に戻った81歳の年の暮れです。既に決意の痛郷だったのでしょう。

刻まれています。3人もの藩主が訪れるなど、いかに赤水さんが惜しまれた人であったか分かりますよね。

幕末の思想家吉田松陰(1830～59)も赤水さんが亡くなって約50年後、

「自分が身にまとう」袴は紙でもよい」。厳格な赤水さんは自らの葬式についても遺言で指示しています。彼が遺言を書いたのは、赤浜に戻った81歳の年の暮れです。既に決意の痛郷だったのでしょう。

東北旅行の途中で赤水さんの墓に詣でています。忠敬も松陰も、赤水図を使っていたといえますよ。まさに巨星墜つ、だったのです。次は最終回。

フリーライター・岡村喬二

原則木曜の掲載です